47427

福　岡　市

影塚第１号墳発掘調査報告

附　影塚第２号墳石室実測図．周辺古墳分布図

福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集

福 岡 市 教 育 委 員 会

１９７２

序　　文

近年、福岡市および周辺地域の開発にともなう、各種造成工事の激増は、はなはだしいものがあります。ここに報告します影塚１号古墳もその例にもれず、宅地造成のために止むなく記録保存のための、緊急調査を実施したものであります。

当委員会では、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので、市民各位の御協力をお願いいたします。本書が各位の郷土に対する認識と理解の資料として、御利用いただきますなら幸甚であります。

本遺跡を調査いただいた熊本大学東洋史研究室および関係各位に対して、深甚の謝意を表します。

昭和47年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　豊　島　延　治

調査関係者

調査委託者　　吉武勝

調　査　者　　松本雅明（熊本大学）

三島　格（福岡市教育委員会）

佐藤伸二（熊本大学・現地主任）

藤田和裕

調査補助員　　片岡英治・工藤英俊（熊本大学）

協　力　者　　石津恵・薄木進・緒方勉・猿渡好夫・西南大学学生

福岡市教育委員会

豊島延治・結城一義・矢野正喜・青木崇・清水義彦・野上淳次・石橋博・山口俊二・三宅安吉・岩下拓二・田中圭介・福田征一・下条信行・柳田純孝・塩屋勝利・折尾学・島津義昭・飛高憲雄・後藤直・黒田安雄

目　　次

Ⅰ　調査にいたる経緯…… 1

Ⅱ　古墳の立地と調査経過…… 2

Ⅲ　調査…… 4

1　影塚第１号墳　　墳丘

石室

遺物・遺物出土状況

2　影塚第２号墳

Ⅳ　まとめ…… 20

Ⅴ　影塚周辺の後期古墳…… 21

挿　図　目　次

第１図　影塚１号墳・２号墳位置図

第２図　影塚１号墳・２号墳地形図

第３図　影塚１号墳墳丘土層図

第４図　〃　石室実測図

第５図　〃　墳丘図

第６図　〃　遺物配置図

第７図　〃　墳丘裾部須恵器出土状況図

第８図　〃　墳丘東斜面須恵器出土状況図

第９図　〃　出土須恵器実測図

第10図　〃　出土須恵器実測図

第11図　〃　出土須恵器実測図

第12図　〃　出土須恵器実測図

第13図　〃　出土須恵器実測図

第14図　〃　出土土師器実測図

第15図　〃　出土須恵器窯印拓影

第16図　影塚２号墳石室実測図

第17図　影塚周辺の後期古墳分布図

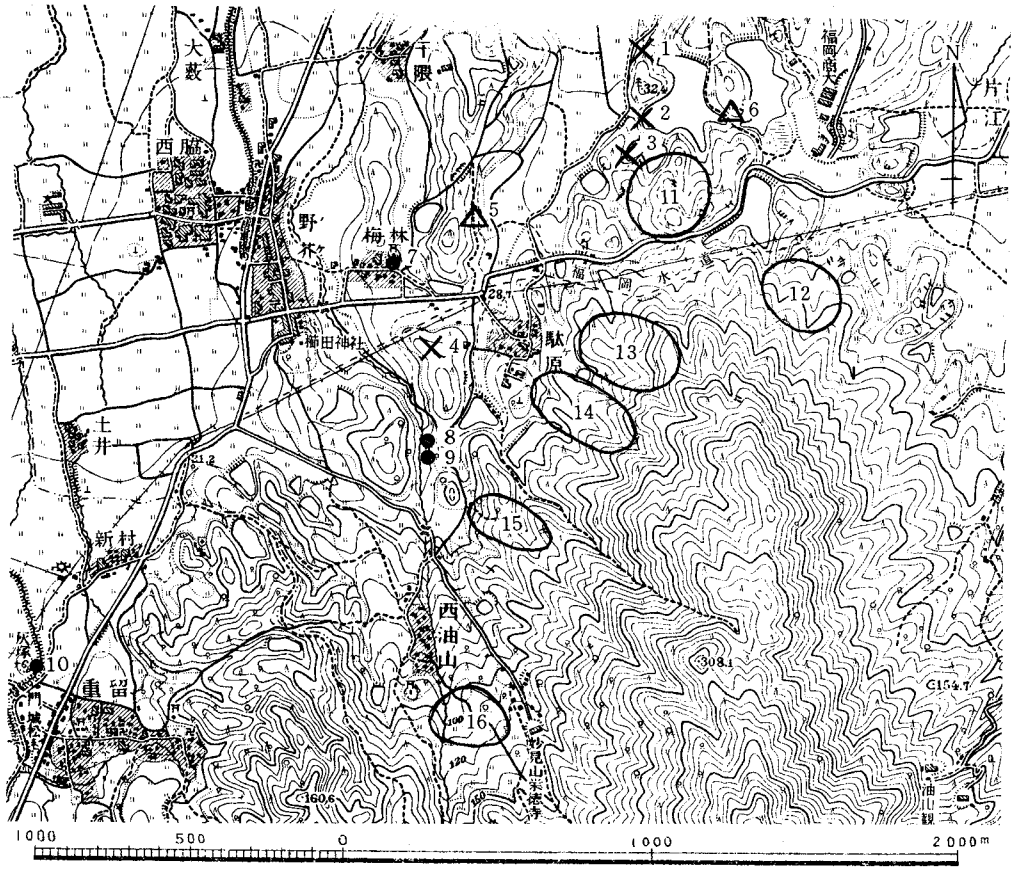
福岡市教育委員会
No.47427
15.10.15
埋蔵文化財センター

Ⅰ　調査にいたる経緯

本墳は、福岡市大字野芥字影塚に位置するが、「福岡市埋蔵文化財調査報告書・第12集・1971年」所収のNo. 329・東大谷遺跡をのせる同一丘陵に所在する。

昭和46年６月、この古墳（東大谷）のある丘陵西側に接する地域を宅地造成したいという申請があり、そのための事前審査を実施した結果、この丘陵上には、前述東大谷の直北に、さらにもう一基の横穴式石室を主体とする古墳のあることを確認した。

ついで翌７月、土地所有者の、福岡市姪の浜在住の吉武勝氏より、上述新発見の、丘陵北側の一基（影塚１号墳）を含む字影塚84の５・６番地を宅地として造成する旨の連絡と調査依頼を受けた。８月３日、再度現地におもむき、羨道部の１枚を除いて他のすべての



× 縄文時代遺跡　△ 弥生時代遺跡　● 古　墳　◯ 群集墳

1.五ケ村池遺跡Ａ・Ｂ地区	5.弥生式土器(高杯)出土地	9.影塚２号墳	13.大谷古墳群
2.五ケ村池遺跡Ｃ・Ｄ地区	6.弥生式土器(高杯)出土地	10.灰塚古墳	14.駄ケ原古墳群
3.五ケ村池遺跡Ｅ地区	7.八幡宮境内古墳	11.七隈古墳群	15.霧ケ滝古墳群
4.クエゾノ遺跡	8.影塚１号墳	12.倉瀬戸古墳群	16.西油山古墳群

第１図．影塚１号墳・２号墳位置図

天井石が取り去られた横穴式石室を主体とする円墳であることを確認した。

本調査は、国庫補助を受けて実施することとなり、調査期間を10月15日から11月４日までの20日間とした。発掘調査を熊本大学に依頼し、発掘担当者には同大学の松本雅明教授および文化課の三島格がなった。現地主任には同大学の佐藤伸二助手があたり、文化課の藤田和裕がこれをたすけた。

また、本調査には野芥町世話人、石津恵氏から宿舎を提供していただいた。そのほか、緒方勉氏、吉武勝氏、および東信建設ＫＫ、西南大学の関係学生諸氏からご援助を得た。記して感謝の意を表したい。

〈附　記〉

今後、上記地名表の遺跡名を下記のごとく訂正する。

No. 329・東大谷遺跡　　影塚２号墳・影塚１号墳（本次調査）

（三島格・藤田和裕）

II　古墳の立地と調査経過

本古墳は福岡市大字野芥字カケツカ84番の３・５・６にあり、84の３に２号墳、84の５と６に１号墳がある。

油山の西麓は小さな谷が無数に入りくみ、複雑な地形を形成している。この先端部には谷川の侵蝕によって削り残されたいくつかの独立丘が点在するが、本古墳はこの独立丘の１つに作られている。この西側を流れる稲塚川に沿ってさかのぼると、約20基ほどの円墳からなる古墳群にぶつかる。（周辺遺跡の章参照）この様な谷あいの古墳群は油山の麓にかなり発見されている。（大谷古墳群、大牟田古墳群等）

谷あいの古墳と異って、本古墳は、一見前方後円墳を思わせる形をした独立丘上にあり加えて２号墳が複室墳で周辺の古墳に比べてかなり大きいことで我々の注目をひいた。

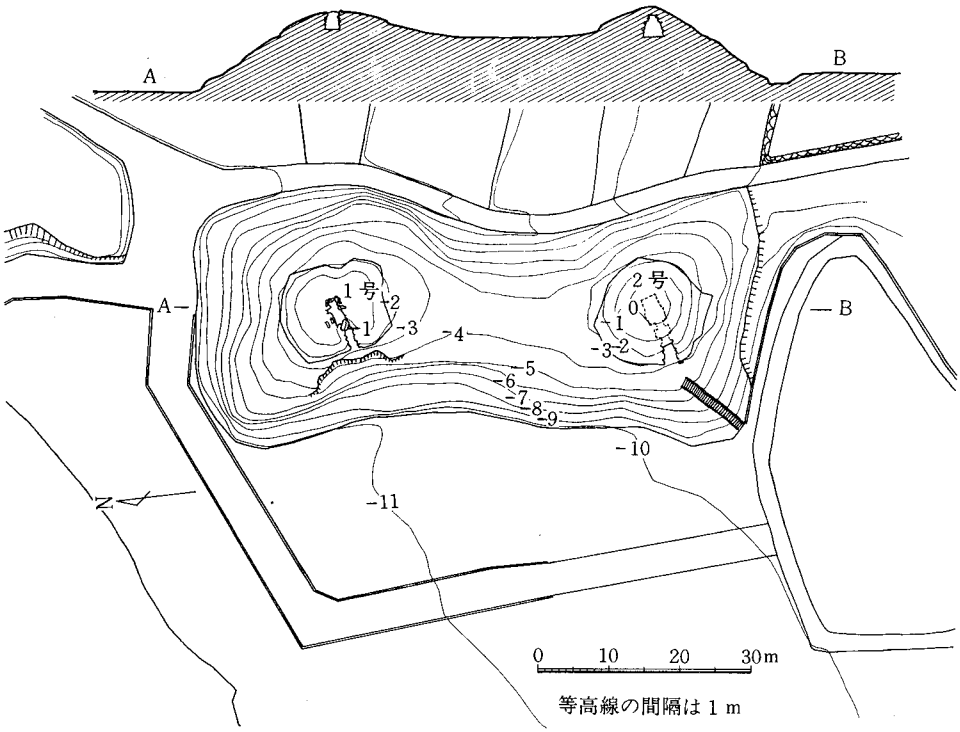
我々の調査は、まず第一に１号墳、２号墳を含めた独立丘全体の地形測量を行ない、前方後円墳であるかどうかを判断することであった。次いで前述の事情で破壊せざるを得なくなった１号墳の実測と発掘調査、さらに２号墳の石室を実測することとした。

調査は10月15日から開始したが、まず、佐藤、片岡、工藤の３名で測量班を作り、$\frac{1}{300}$で独立丘の地形測量、約２km西にある三角点からの標高の移動にかかった。藤田、猿渡の２名は人夫を使って発掘予定の１号墳の雑木や竹の伐採を行なった。17日には一応の伐採をおえたので、石室内部の清掃にかかった。石室の床はセメントで塗られ、奥壁に沿って祭壇が作られ、壁には「妙法、山中大権現守護」と刻まれている。床のセメントをはぐと、すぐ地山で、石室の内部は完全に破壊されていることが解った。祭壇の下のセメントを取り除くと、レンガが組まれ、その下が空洞となっていた。近代の墓の可能性があるので、協議した結果、この部分はこれ以上手をつけないことにした。当初予定していた近所の人

夫がどうしても集まらないのは、ここに原因があると思われる。20日になってやっと西南学院の学生アルバイト２名が参加した。この日、測量班は$\frac{1}{300}$の地形図の作成を一時中止し、明日からの墳丘発掘にそなえて１号墳の$\frac{1}{100}$測量図を作った。

墳丘の発掘はまず石室の主軸線の延長上に墳丘裾まで達する第１トレンチを設定し、掘開にかかった。さらに石室主軸線と直交し墳丘裾にいたるトレンチを設定した。石室の北側のを第２トレンチ、南側のを第３トレンチとした。これらのトレンチは地山まで掘り下げ、墳丘の盛土や石室構築の際の堀り込みなどを観察した。掘り込みが石室とどの様な関係にあるかをもう少し詳しく観察するために、３つのトレンチと羨道部にはさまれた四区画の発掘にかかった。三つのトレンチの片側には土層観察のために幅約１ｍほど掘開せずに残しておいた。第３トレンチと羨道部に挾まれた墳丘の西南部から多量の須恵器、土師器が出土した。器種は高坏、坏、甕、壺、甕などである。須恵器の出土は第１トレンチと第３トレンチに狭まれた墳丘東南部まで見られたが、この部分で発見されたのは大形の壺と甕だけであった。墳丘の西北部と東北部からは土器類の発見はわずかであった。また、須恵器や土師器の間にまじって鉄鏃や縄文時代、弥生時代の土器、石器類が発見されたのが注目された。

測量班は25日に測量図を完成し、工藤、片岡は１号墳と２号墳の石室の実測にかかった。11月３日には石室の写真撮影、実測も完了したので、全員で１号墳の土層図を作成し、掘り残した部分を掘開して、現地での調査を終った。調査期間中時間を見て、藤田は周辺の古墳の踏査を行ない、数十基の古墳を発見した。



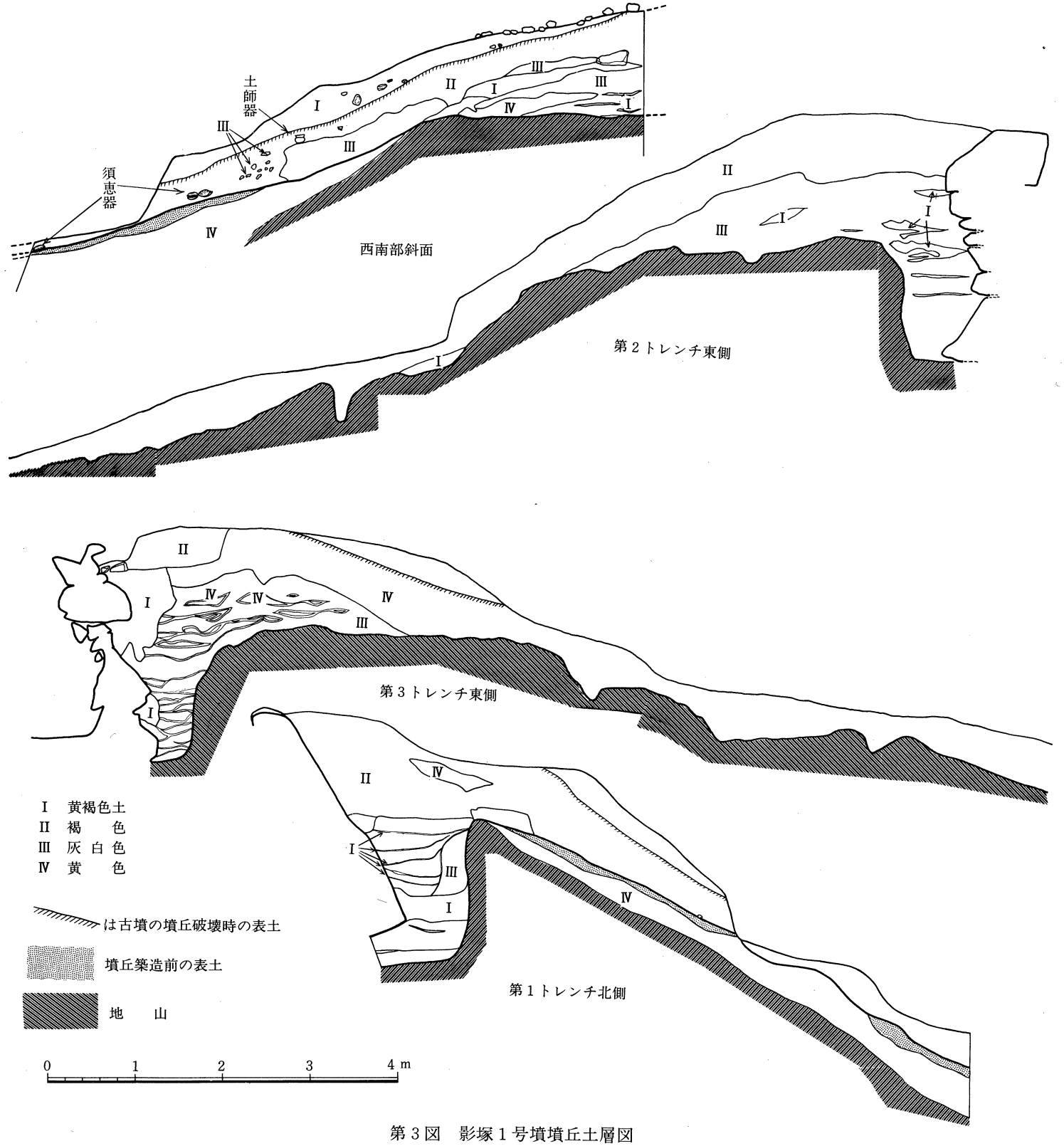
第2図　影塚1号墳・2号墳地形図

Ⅲ 調　　査

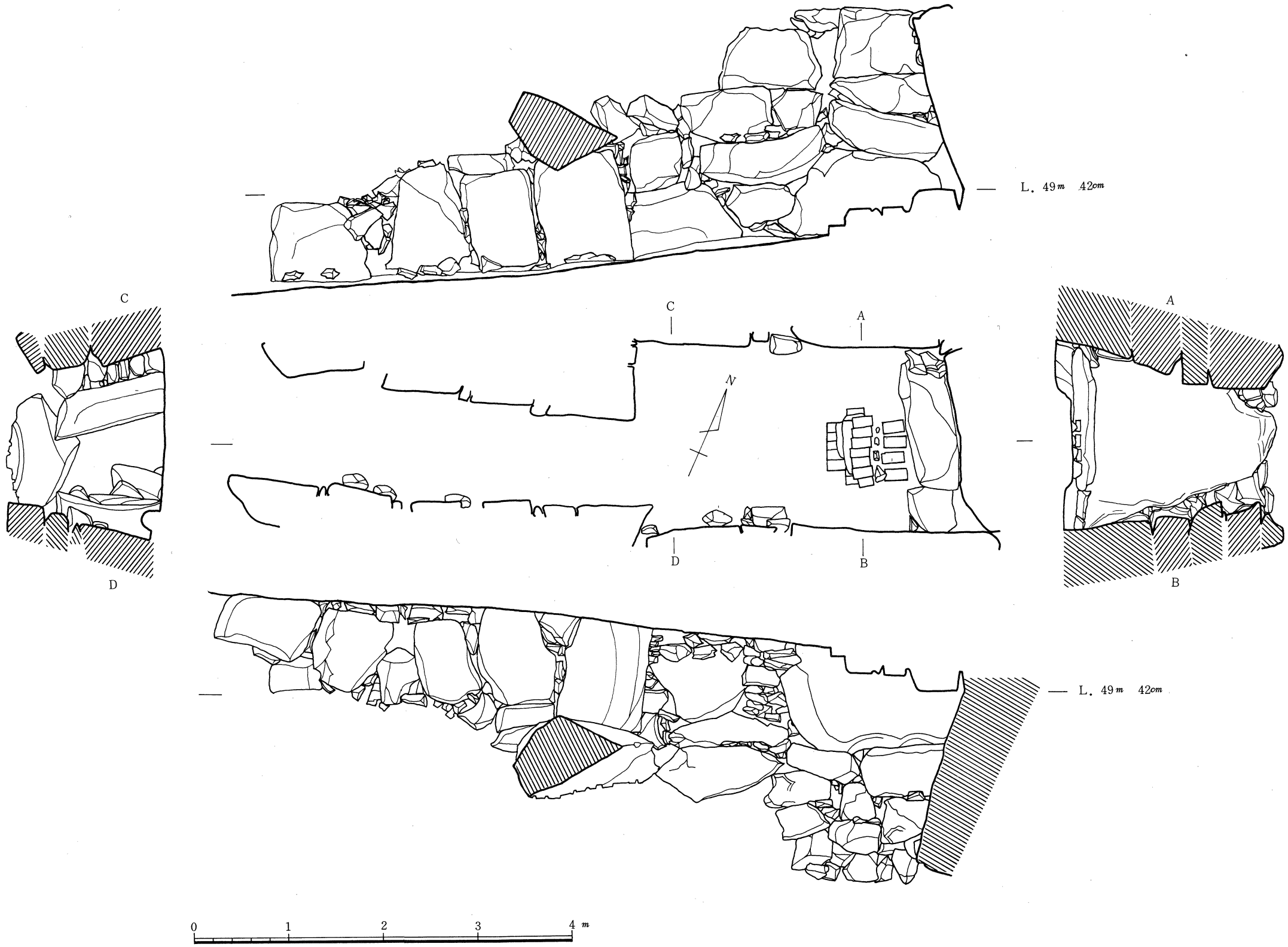
1、1 号 墳

石 室

西に向って開口する横穴式石室をもつ円墳である。石室内部は完全に破壊されており、奥壁には「妙法、山中大権現守護」と書かれ、祭壇が作られている。石室の天井石は完全になくなっており、羨道部の上に乗せられた石が1つだけ残っている。この石にはクサビの痕がついていることから、この古墳の天井石が建築用の石材として切り出されたことが窺われる。石室は地山に掘り込まれた不整形な細長い土坑の中に大小の石材を積み上げて作られている。この土坑は羨道側に開口しており、土坑の下面から地山の切り込みの上端までの高さは奥壁裏側で 1.6m、側壁の裏側で 1.4mほどあり、ほぼ垂直に切り込まれているので、石室の床近くに積まれた大きな石は、羨道側から持ち込まれた可能性が強い。石室の平面形はほぼ長方形（幅1.95m奥行 3.3m）である。羨道は細長く（幅は石室に接する部分で 0.9m、長さ 4.3m）、石室の中心線より南によった位置に作られており、い



第3図 影塚1号墳墳丘土層図

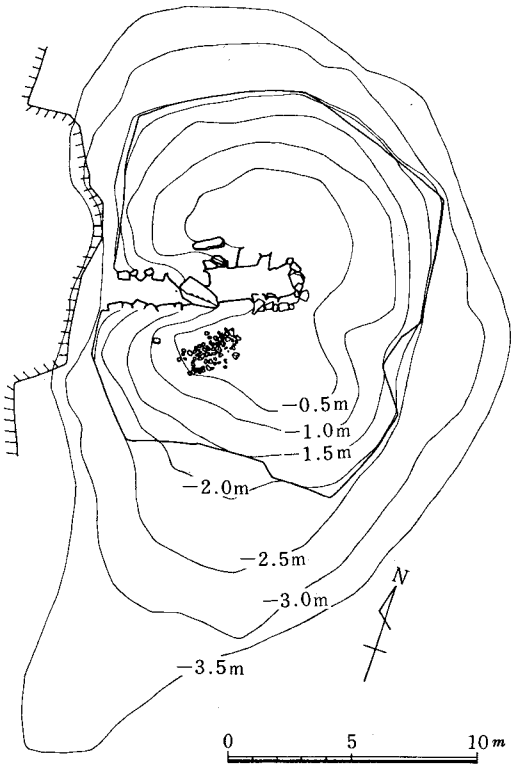


第４図　影塚１号墳石室実測図

わゆる片袖の横穴式石室に属するものであろう。

墳　丘

現在の墳丘は高さ約 2.5m、直径約15mである。石室の天井が取り除かれているため、墳丘はかなり変形されているが、それでも等高線はほぼ石室を中心として廻っている。墳丘の裾は20cm～40cmほど切り立っているので、墳丘と自然の岡との境界は明確である。墳丘裾の平面形はかなりいびつになっており、後世に削られたことを物語っている。墳丘が最も変形を受けているのは西側（羨道側）と東側である。これは古墳が築かれている岡自体の性格、すなわち西側と東側の斜面が北側の斜面に比べて急であることによるのであろう。トレンチの掘開によって、古墳築造当時の墳丘の裾が北側と南側で確認されたが、現在の墳丘の裾よりやや深いだけで平面的な位置には大差がない。



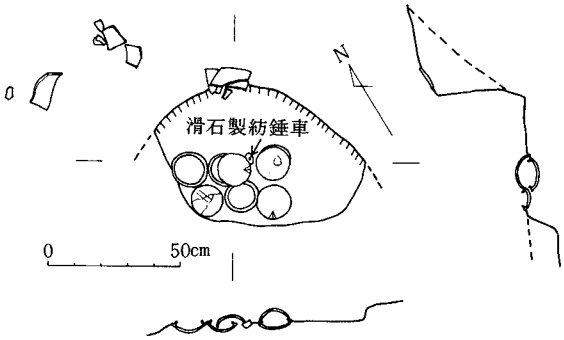
第5図　影塚1号墳丘図

トレンチの土層断面の観察によると、第2トレンチと第3トレンチでは地山の上に盛土が乗っているが、第1トレンチでは地山の上に黄色土と墳丘構築前の表土があり、その上が盛土となっている。羨道の両側を掘開した時でも、第1トレンチと同様な事実が観察された。このことから、古墳を作る部分はあらかじめ整地し、その後土坑を堀り、石室を構築しながら、墳丘を盛り上げていったことが推測される。石室には裏ごめの石がほとんどなく、土拡と石材の間には灰白色の土と黄色の土が交互にたたきしめられ、石と石の間には黒色の粘土がつめられ固定されている。墳丘の盛土は土坑内の盛土に比べて土のブロックが大きく、積み方もかなり雑なように思われる。墳丘の盛土には、灰白色土、黄色土、黄褐色土の三種類の土がある。灰白色土は地山の花崗岩が風化したもので、黄色土はこの地山の上をうすくおおった土である。黄褐色土は黄色土に腐植物が混ったものであろう。これらの土は古墳の周辺で普通に見ることができた。また、石と石の間につめられた黒色の粘土は、付近で発見することはできなかったが、たぶん下流の沖積平野から採集して来たものであろう。

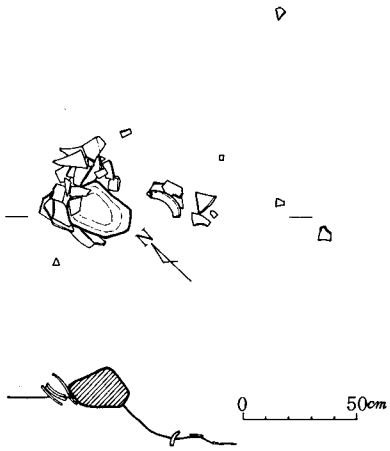
遺　物

（出土状態）

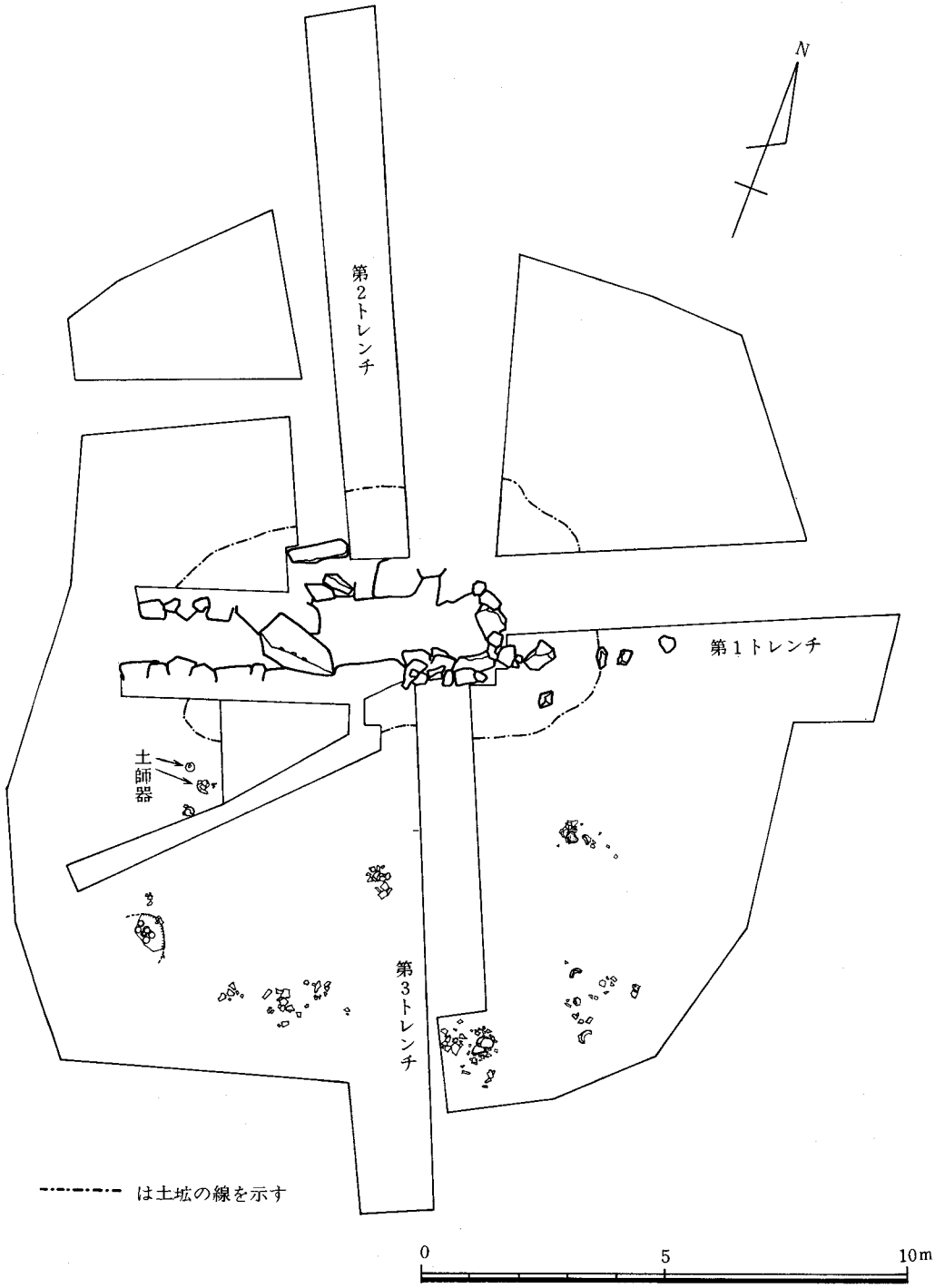
盗掘を受けていたため遺物は石室内からはほとんど発見されなかった。主に墳丘の西南部から東南部にかけて発見されたが、中でも西南部が最も多い。石室の北側には、出土遺物は極めて少い。墳丘の西南部の土層断面を観察すると、遺物の多くは、石室が破壊される以前まで表土であったと思われる、腐植を含みやや黒味を帯びた土層の少し下から発見された。羨道の南側から土師器の大形高坏の脚部が二つ並んで発見されたが、その内の一つは立ったままであった。杯部は少し離れた所から発見され、しかも脚部下半に比べて表面が著しく傷んでいた。この出土状態は高杯が当初脚部を少し埋めるようにして墳丘上にすえられていて、そのまま放置されている間に自然にこわれ、埋まったことを物語っている。この高坏の近くには、ほぼ完全な形をした須恵器の小形壺と土師器の壺が出土している。ここより少し下った墳丘の斜面（二組）と裾（六組）には須恵器の坏が並んで出土し、その内斜面の二組と裾の三組は蓋がかぶったままであった。墳丘の南側（第３トレンチ内）の斜面では須恵器の大甕の底部が発見されたが、その上半部は墳丘南裾に流れこんだようなかたちで発見された。墳丘の東斜面では大形の須恵器の壺が、石でつぶされたようなかたちで出土した。この外の破片となった土器類は、ほとんど墳丘上を流れ落ちるようなかたちで発見されている。以上の出土状態から考えると出土した土器類のすべては、送葬儀礼に際して墳丘上にすえられ、そのまま放置されていて、自然に埋没したものと考えてよかろう。これらの遺物をおおっていた腐植を含んだ土層は、古墳が築造された後、かなり時間が経過し草木が茂った頃にできたものであろう。須恵器や土師器などが黒ずんだ土層より下から発見されたのは、墳丘内に埋めこまれたからではなく、古墳が築かれてまもないころ、すなわち墳丘の土砂が流れやすい時期に埋没したのであろう。



第６図　墳丘裾須恵器出土状況図



第７図　墳丘東斜面須恵器出土状況図



第８図　影塚１号墳遺物配置図

（須恵器）

坏　坏身に蓋受をもったものと、蓋受のないものとがある。蓋受のない坏は二個体で、その内一つには高台が付いている。蓋受のある坏は蓋と身がかぶさって出土したものが五組ある。この内三つには身の底部に著しい灰かぶりがみられる。蓋には口縁部近くに部分的に灰かぶりが見られる。このことから身と蓋を合せ、蓋を下にして焼かれたことがわかる。灰かぶりのほとんどない方も、蓋の頂部に火のまわりの悪いためにできた斑点があるので同じようなことが言える。外に、蓋の完形が二つ、身の完形が二つあるが、大きさや、色調、出土状態から、別々のものである可能性が強い。破片として出土したものに身が二つ、蓋が三つ（内一つは細片）ある。

高坏　高坏の脚部と蓋が一つづつ発見された。大きさや色調から考えて、組合さるものであろう。

聰　胴部の破片数個と口縁部の破片が数個出土したが、色調や大きさから、同一個体の破片と思われる。残念ながら穴の部分はないが、全体の形から聰であることはまちがいなかろう。

壺　六個体であるが、大小二つに大別できる。小形は高さ24cm、胴部最大径24cm、口径16cm前後で、大形は高さ47cm、胴部最大径49cm、口径23cm前後である。小形壺は３個体(内一つはほぼ完形）、大形壺も３個体（内一つは全体の３分の２ほど）あり、大形壺の一つと小形壺の二つには、口縁部内面や肩部などに灰かぶりや自然釉が見られる。

大甕　同一個体と思われる底部と胴腹部の破片が多量にあるが、全体を復原することはできない。特に甕の上部が著しく欠失している。このことは口縁部の小破片がわずかに三片しか出土していないことに良く示されている。全体にあずき色を呈して焼成はかなり悪い。特に底部は黄褐色で、きわめてもろい。

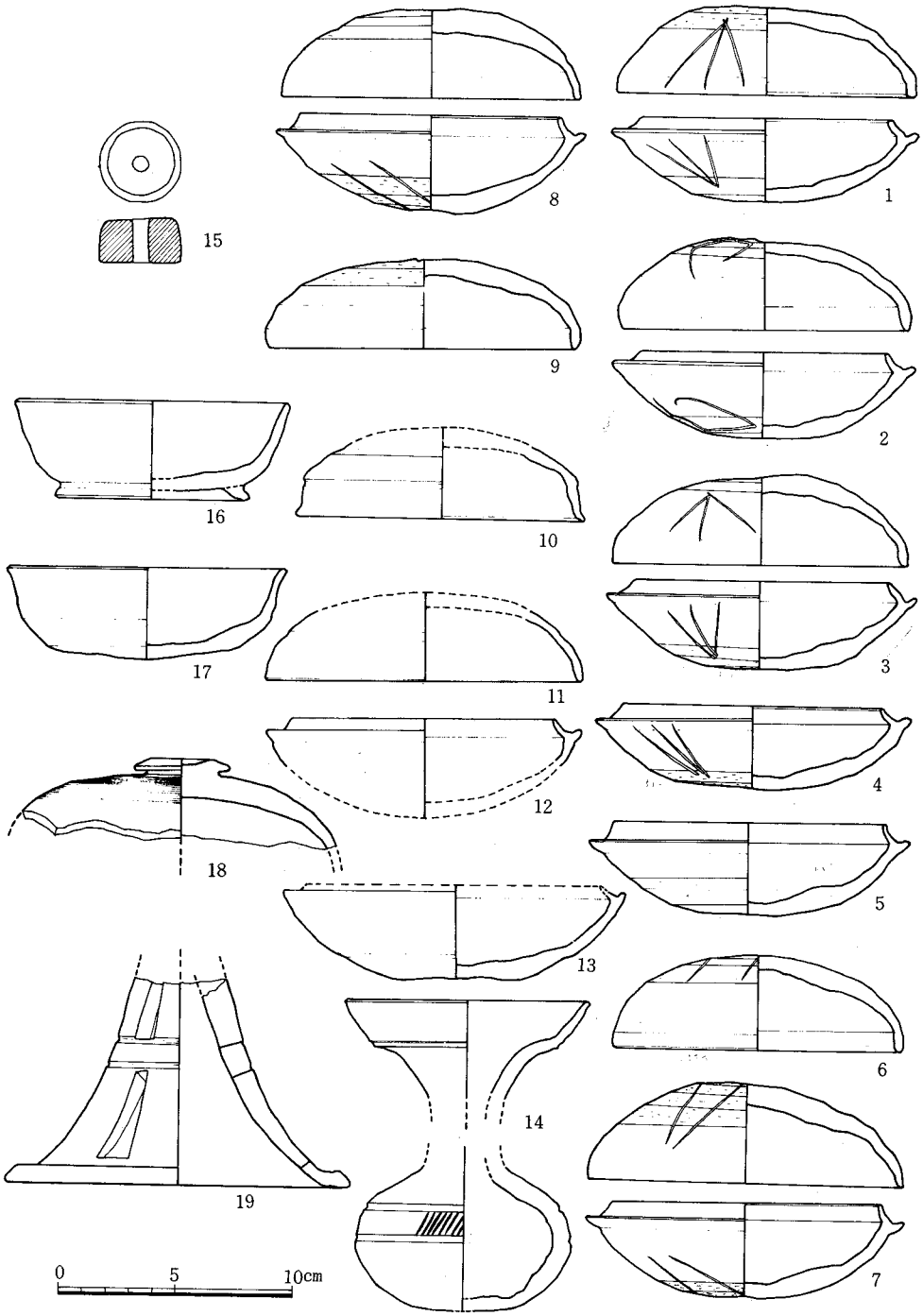
（土師器）

高坏　大形が二つ、小形が三つある。大形の二つは並んで発見されたものであるが、坏部の形態、器面の調整、胎土などにかなり違いがある。小形の高坏は脚部の形態に多少の違いはあるが、器面の調整、胎土などほとんど同じである。小形の高坏はすべて、大形の高坏よりやや下った墳丘斜面に破片となって発見された。しかし比較的かたまって発見されたので原位置をさほど動いていないと思われる。

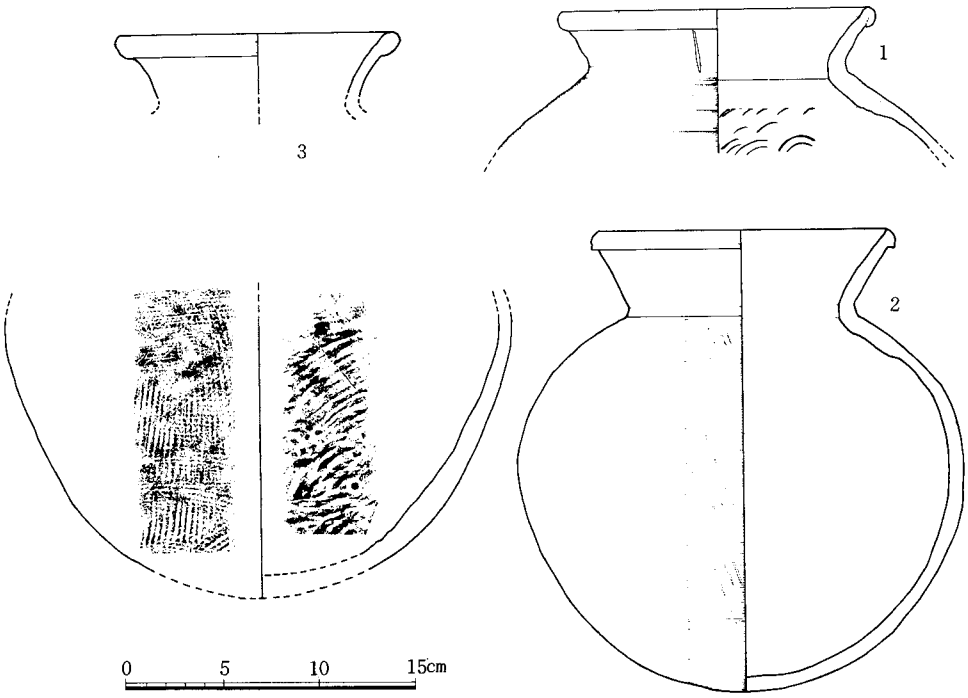
坩　一個体である。球を半分にしたような形の体部にほぼ直立する口縁部を付したもので、器壁はうすく、器面は入念にヘラ研きされている。胎土中に丹を混入したと見えて、全体に濃い赤褐色を呈する。胎土や色調など小形の高坏と同じである。

（その他）

墳丘西南裾に並べられていた坏の間から滑石製の紡錘車が発見された。灰色と白のまだ



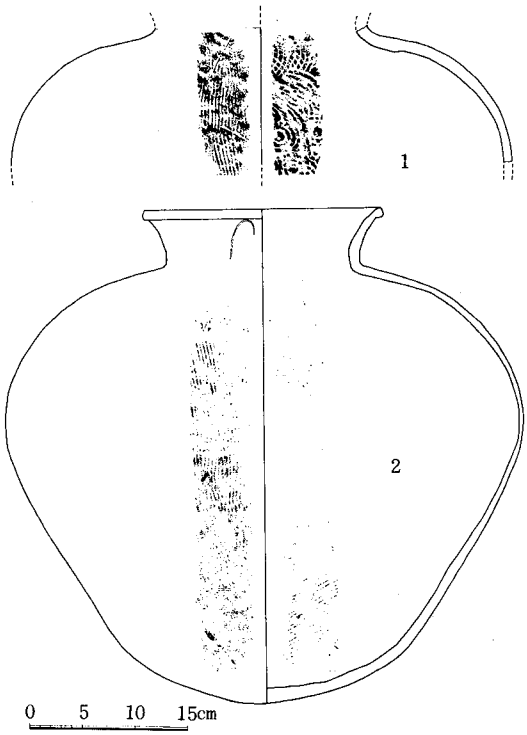
第９図　影塚１号墳出土須恵器実測図



第10図　影塚１号墳出土須恵器実測図

らな滑石を研磨して作られている。

鉄鏃がかたまったと思われる鉄のかたまり一個と鉄鋌が数個発見されている。ほとんど須恵器片や土師器片に混って発見されており土師器や須恵器とともに古墳に供えられたものと思われる。しかし影塚の立地等から墳丘の盛土とともに運びこまれたとしか考えられない縄文晩期土器、弥生式土器、黒耀石剝片、玄武岩製の石器片なども同時に発見されているので、鉄鋌が

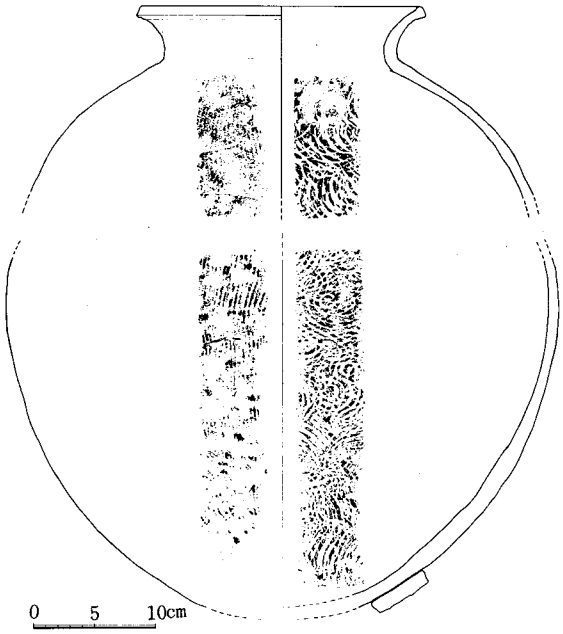


第11図　影塚１号墳出土須恵器実測図

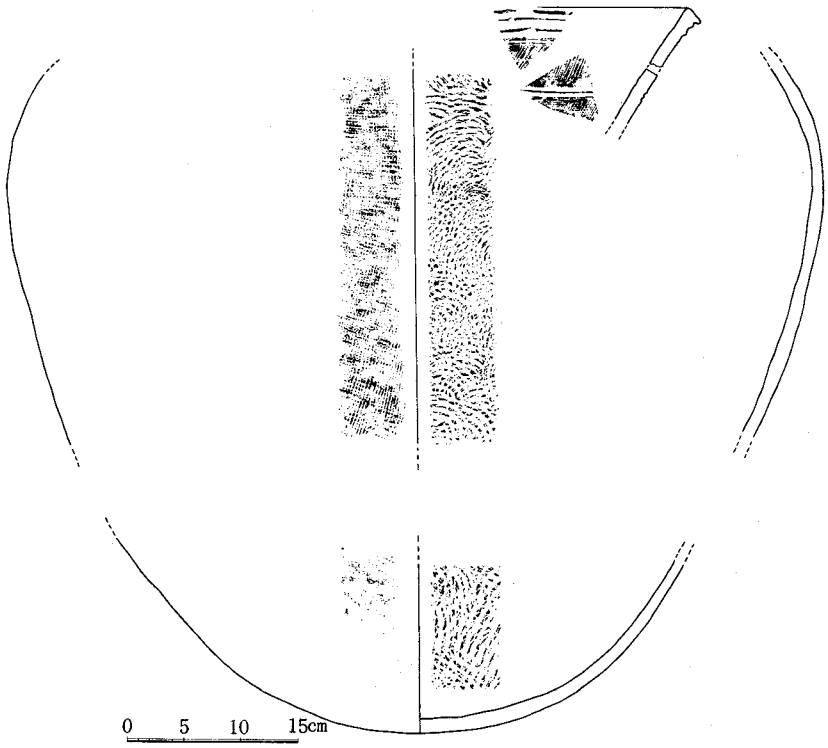
墳丘の土とともに運びこまれた可能性も残っている。ちなみに、この影塚周辺の縄文遺跡は第１図の通りである。現在、周辺の遺跡からは縄文晩期土器の発見はないが、未確認の縄文晩期遺跡があるのかもしれない。

２、　２　号　墳

独立丘の南端に位置する径16m、高さ４ｍの円墳で、裾の部分は削られ、高さ50cm～ 100cmほど切り立っている。これは特に北側（１号墳側）で著しい。西に開口する複室墳で、石室は長方形の後室(奥行 3.8m、幅 2.1m）と、長方形の前室（奥行１ｍ幅1.9m）さらにその前に入口に向ってやや開いた羨道部（奥行 3.6m、幅は入口で 1.7m 前室のところで１ｍ）がつづく。石室の横断面は台形



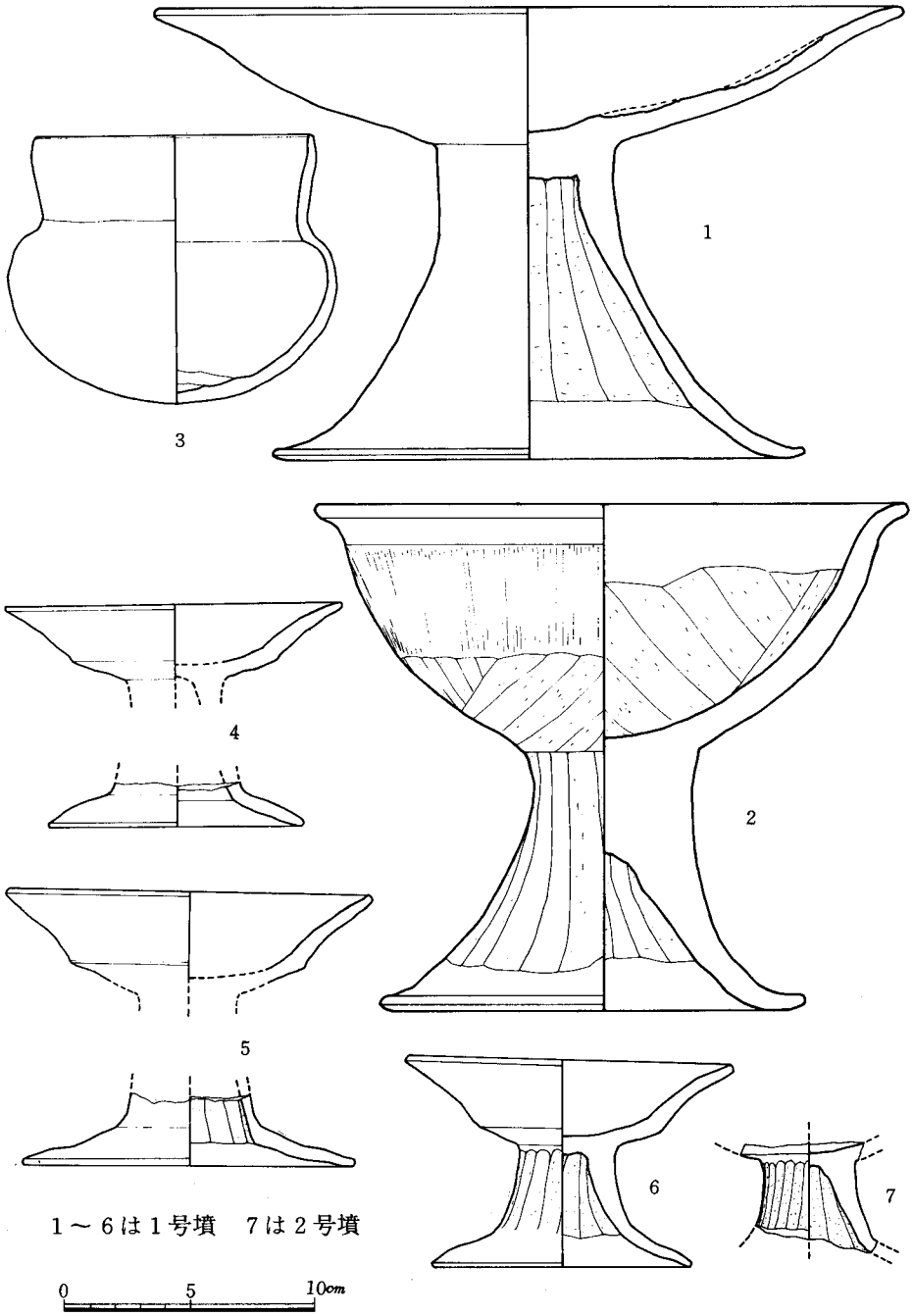
第12図　影塚１号墳出土須恵器実測図



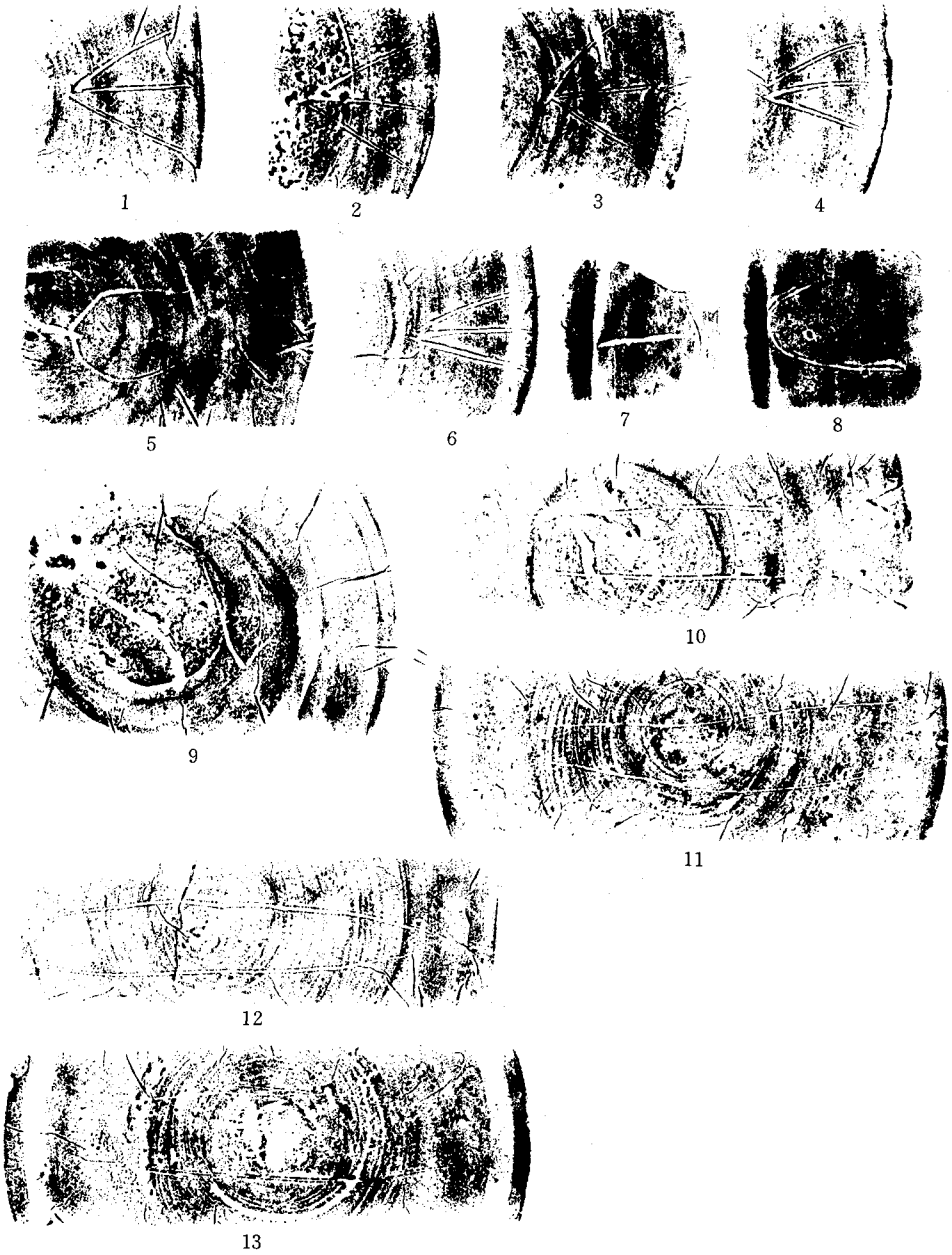
第13図　影塚１号墳出土須恵器実測図

で、幅に比して高さはかなり高い。石室の縦断面を見ると、羨道、前室、後室と順次に天井が高くなり、所謂巨石墳とは異っている。

遺物は羨道の南側（向って右）の石組の上から土師器の高杯の脚部が出土したのみである。この土師器は１号墳出土のものと同形である。石室の方向が１号とほとんど同じであることと共に１号、２号が相前後して作られたことを物語るものであろう。



第14図　影塚出土土師器実測図



1．第９図１の上　2．第９図１の下　3．第９図３の上　4．第９図３の下
5．第９図２の上　6．第９図４　7．第10図１　8．第11図２
9．第９図２の下　10．第９図６　11．第９図８　12．第９図７の上
13．第９図７の下

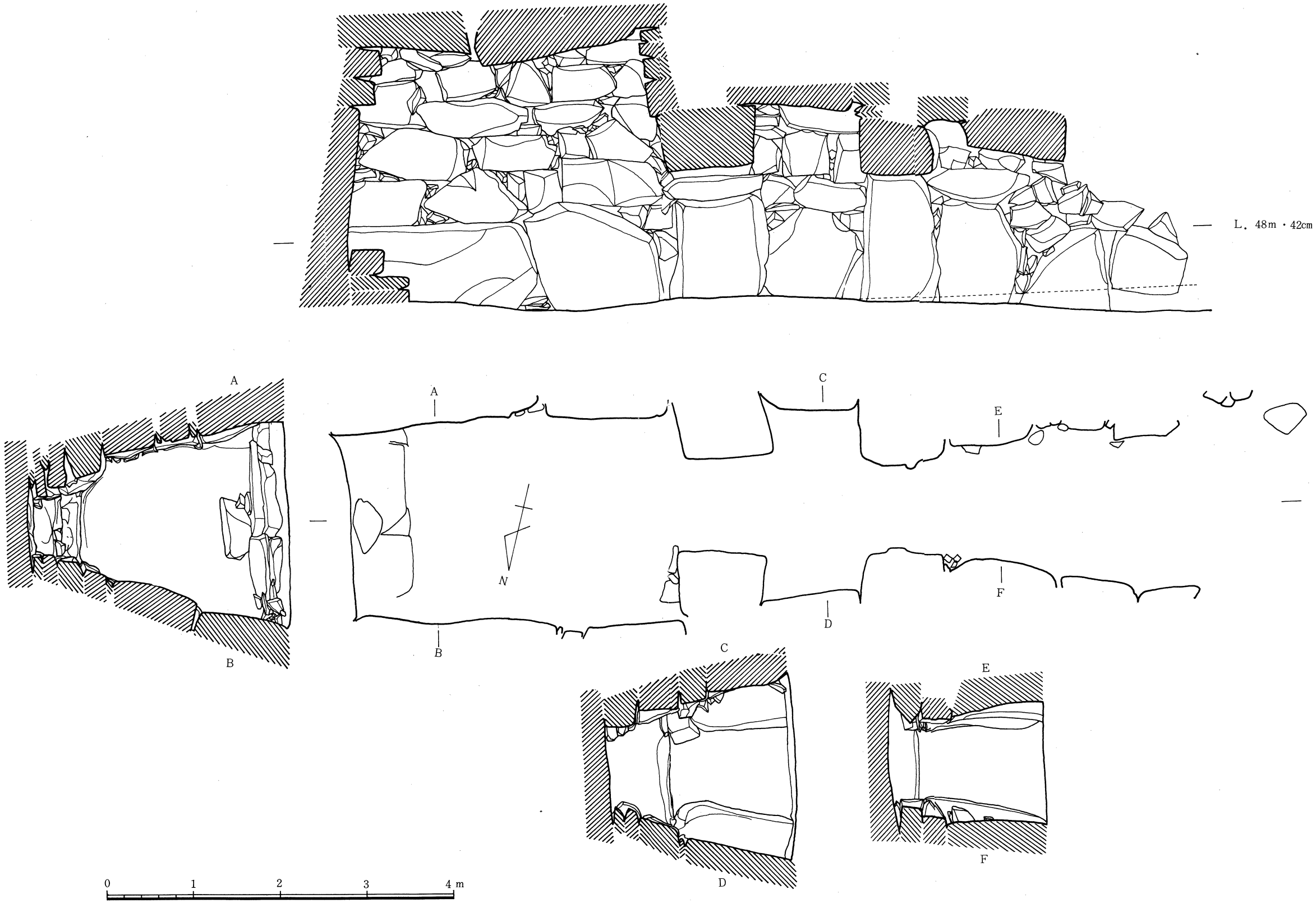
第15図　窯印拓影

影塚１号墳出土土器一覧表

実測図番号	種別	特徴	出土状態
第９図 １の上	須恵器 坏蓋	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。頂部はヘラ削りである。口縁部の外側の一部にわずかに灰かぶりが見られる窯印の位置は灰かぶりの反対側であるロクロは右廻り。	１号墳の墳丘西側裾に六組出土した中の一つである。身に蓋がかぶった状態で出土した。
第９図 １の下	須恵器 坏身	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。底部はヘラ削りである。底部のほとんど全面に褐色の灰がかぶっている。窯印は灰が強くかぶった部分から少しずれた位置にある。ロクロは右廻り。	同上
第９図 ２の上	須恵器 坏蓋	色調はあずき色。胎土に小石を含む。頂部はヘラ削りである。口縁部の外側の一部に灰かぶりがある。窯印は灰がかぶった方向から少しずれている。ロクロは右廻り。	同上
第９図 ２の下	須恵器 坏身	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。底部はヘラ削りであるが、削り方がやや粗雑である。底部には灰がかぶり部分的に小石が焼き付いている。窯印は灰がかぶった方向から少しずれているロクロは右廻り	同上
第９図 ３の上	須恵器 坏蓋	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。頂部はヘラ削りである。口縁部の一部に少し灰がかぶっている。窯印は灰がかぶった側の反対側にある。ロクロは右廻り。	同上
第９図 ３の下	須恵器 坏身	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。底部はヘラ削りである。底部には灰がかぶっている。窯印の位置は灰が強くかぶった所から少しずれている。ロクロは右廻りである。	同上
第９図 4	須恵器 坏身	色調は青灰色。胎土に小石を含む。底部はヘラ削りである。灰かぶりは底部の三分の二と、これに続く蓋受の部分、さらに反対側の内面に見られる。焼き歪があるので焼成中に蓋が割れたのではないかと思われる。窯印の位置は灰が強くかぶった所より、少しずれている。ロクロは右廻りである。	１号墳の西南裾に六組出土した中の一つである。坏身が出土した。
第９図 5	須恵器 坏身	色調は青灰色。底部はヘラ削りである底面に少し灰がかぶっている。ロクロは右廻りである。	同上
第９図 6	須恵器 坏蓋	色調は青灰色。胎土に小石を含む。頂部はヘラ削りである。頂部に火のまわりが悪いためにできた黄色い部分がある。ロクロは右廻りである。	１号墳の西南裾に六組出土した内の一つである。これに合う坏身は発見されていない。
第９図 ７の上	須恵器 坏蓋	色調は灰色。胎土に小石を含む。頂部はヘラ削りである。頂部に火のまわりが悪いためにできた黄色い部分があるロクロは右廻りである。頂部に窯印がある。	１号墳の墳丘西側斜面に二組並んで出土した内の一つである。坏身に蓋がかぶって出土した。

実側図番号	種別	特徴	出土状態
第10図 3	須恵器 壺	色調は灰色（内面は黒色）。口縁部の内面と胴部の外面に灰がかぶっている。	1号墳の墳丘南裾より出土
第11図 1	須恵器 壺	色調は灰白色。肩部外面に灰かぶりあり。	1号墳の墳丘西斜面より出土
第11図 2	須恵器 壺	色調は灰色（内面は黒色）。底部外面は櫛状のものをあてて、器面調整されている。口縁部の内外面、肩部外面には灰と自然釉がかぶっている。口縁部外面に窯印がある。	1号墳の墳丘東斜面より出土
第12図	須恵器 壺	色調は青灰色。胎土に小石を含む。底部には、焼成の際に台として使用された須恵器片が癒着している。口縁部内面と、肩部には灰がかぶっている。	1号墳の墳丘東斜面より出土
第13図	須恵器 甕	色調はあずき色。底部は生焼けで黄褐色を呈する。	1号墳南斜面（第3トレンチ）墳丘南裾より出土
第14図 1	土師器 高坏	色調は黄褐色。ただし脚部内面以外は丹塗り磨研されていて、赤色である。坏部の内面は表面がかなり剝落している。脚部内面はえぐるように削られている。	1号墳墳丘西斜面から並んで発見されたものの一つである。
第14図 2	土師器 高坏	色調は黄褐色。胎土に砂を含む。坏部下半は、内外面ともヘラ削りである。坏部外面の上半にはハケ目が見られる。脚部の外面は上下にヘラ削りされ、内面はえぐるようにヘラ削りされている全体に器壁が厚く、粗雑な作りである	同上
第14図 3	土師器 坩	色調は赤褐色。胎土に丹を交ぜたと思われる。口縁部内外面、体部外面はヘラ研きである。体部内面はヘラ削りされているが底の付近以外は、きれいになでられている。	1号墳の墳丘西斜面より出土
第14図 4	土師器 高坏	色調は赤褐色。胎土に丹を交ぜたと思われる。坏部と脚部外面はヘラ研きである。脚部内面はえぐるようにヘラ削りされている。	1号墳の墳丘西斜面より出土
第14図 5	土師器 高坏	同上	同上
第14図 6	土師器 高坏	色調は赤褐色。胎土中に丹を交ぜたものと思われる。坏部の内外面と脚部下半の外面はヘラ研きである。脚部上半は内外面ともヘラ削りである。外面は上下に、内面はえぐるように削られている。	同上
第14図 7	土師器 高坏	色調はくすんだ赤褐色。胎土中に丹を交ぜたと思われる。坏部内面はヘラ研きである。脚部上半は内外面ともヘラ削りで外面は上下に、内面はえぐるように削られている。	2号墳の羨道部南側の石組みの上より採集。墳丘より落ちて来たものであろう。

実側図番号	種別	特徴	出土状態
第9図 7の下	須恵器 坏身	色調は灰色。胎土にかなり小石を含む底部はヘラ削りである。ロクロは右廻りである。底部に窯印がある。	同上
第9図 8の上	須恵器 坏蓋	色調は青灰色。胎土にかなり小石を含む。頂部はヘラ削りである。頂部近くに火のまわりが悪いためにできた黄色い部分がある。	同上
第9図 8の下	須恵器 坏身	色調は青灰色。胎土にかなり小石を含む。底部はヘラ削りである。ロクロは右廻りである。底部に窯印がある。	同上
第9図 9	須恵器 坏蓋	色調は黄灰色。胎土に小石を含む。全体が生焼けである。頂部はヘラ削りである。ロクロは右廻りである。	1号墳の西側裾より単独で出土した。
第9図 10	須恵器 坏（高坏）蓋	色調は青灰色。頂部はヘラ削り。小破片であるため坏の蓋か高坏の蓋かはっきりしない。	1号墳の石室内出土
第9図 11	須恵器 坏蓋	色調は濃い紫色。小破片である。	1号墳羨道部出土
第9図 12	須恵器 坏身	色調は濃い灰色。胎土に小石を含む。底面に灰かぶりあり。小破片である。	1号墳西斜面出土
第9図 13	須恵器 坏身	色調黄白色。生焼けである。底部にはヘラ削りなどの整形痕はない	1号墳西斜面出土 生焼けの坏蓋と思われる破片が近くから出土している。
第9図 14	須恵器 聰	色調は灰色。底部はヘラ削りである。口縁部内面、底部内面、肩部に灰がかぶっている。穴の部分の破片はない。	1号墳の墳丘西斜面より破片となって出土した。
第9図 16	須恵器 坏身	色調は灰色。胎土に小石を含む。	1号墳の墳丘西斜面と前庭部から破片として出土した
第9図 17	須恵器 坏身	色調は灰色。胎土にわずかに砂を含む底部に黄白色をした生焼けの部分がある。全体の3分の2ほどの破片である。	1号墳の墳丘と石室内より出土。
第9図 18	須恵器 高坏蓋	色調は青灰色。胎土に小石を含む。頂部のつまみの廻りには、櫛状のものをあてて、器面を調整している。	1号墳丘西北斜面より出土
第9図 19	須恵器 高坏脚	色調は青灰色。胎土には、わずかに砂を含む。すかしは二段で各段に三ヵ所ある。	1号墳の墳丘斜面より出土
第10図 1	須恵器 壺	色調は青灰色（内面は濃い灰色）。胎土に小石を含む。肩部は櫛状のものをあてて器面を調整している。内面のタタキ目はかなり擦消されている。口縁部端を折り曲げて肥厚させた状態がよくわかる。口縁部外面に窯印がある。	1号墳の墳丘西斜面より出土
第10図 2		色調は青灰色。胎土に小石を含む。体部外面は櫛状のものをあてて器面調整されており、タタキ目はわずかに残るだけである。内面には、タタキ目がみられない。	1号墳の墳丘西斜面より出土



第16図　影塚２号墳石室実測図

Ⅳ　まとめ

今度の調査では次のことを知ることができた。

影塚は極めて前方後円墳に類似した独立丘上の両端に、ほぼ同じ大きさの円墳が築かれたもので、前方後円墳ではない。しかし影塚が周辺の古墳群から独立した位置にあること、石室の方向が1号・2号ともほぼ同じであること、周辺の古墳群に比べて石室が大きいことなどを考えると、1号・2号を合せた影塚全体が前方後円墳に準じるものであった可能性も残っている。このことに関して、巨大な複室をもつ熊本県八代郡の大野窟古墳①が、その東側にある円墳とともに極めて前方後円墳に似た形をしていることが思い起される。

周辺の古墳群を見ると、そのほとんどの石室が谷に向って開口している。これは石室構築のしかたと関係があるのではなかろうか。今回の発掘結果においても、石室は羨道側から石を持ち込み、構築されたと考えられるので、石室の向きが石材を切り出した場所を向く可能性が強い。油山一帯は谷に石が多く、現在でも谷川の転石を切り出している。この二つを結びつけると石室が谷に向って開口することの一つの説明となる。このように考えると油山周辺の古墳が谷間か、谷を少し登った斜面に多く築かれていることの説明にも好都合である。

墳丘の中心がほぼ石室の中心にあることや1号・2号の石室の向きがほとんど同じであることから、古墳を作る際に何かの基準があったと思われる。それにひきかえ、石室を取り巻く土坑は平面的には極めて不整形である。これはあらかじめ予定した石室内面に基準をおいて、石材の大きさに合せて土坑が堀られたことを物語るものであろう。

墳丘上から発見された須恵器・土師器などは送葬儀礼に際して墳丘上に立て並べられたものと考えられる。墳丘の西側の裾に坏や高坏などの小形のものを、それから少し上った所に壺や高坏など中程度のものを、さらに大きな壺・甕を並べていたと思われる。紡錘車・鉄鋌なども同時にそなえられたものであろう。こうした遺物のあり方は沖ノ島の6～7世紀ごろの祭祀遺跡（6号遺跡②）の遺物のあり方と一脈相通じるものがある。

出土した須恵器には極めて強い火力で焼成されたために自然釉や灰かぶりのあるものと火力が弱く生焼けになったものとがある。自然釉や灰かぶりのあるものには「⋔」や「∩」の窯印があり、比較的火力が弱い方には「||」の窯印がある。これらの点から、二つ以上の窯で焼かれたと考えられる。どちらかが追葬の際のものではないかとの疑いも出るが、墳丘裾から並んで出土した六組の坏の中に両者とも見られるので追葬の際のものとは考えにくい。灰かぶりの状態を観察すると、坏は蓋と身を合せ、蓋を下にして焼かれていることを知ることができる。これは自然釉によって蓋と身が癒着するのを防ぐ意味があるのであろう。筑紫郡大野町の野添六号窯③で、多少床面から浮いているとはいえ、坏身が蓋にのっかって出土しているのは興味深い。このような焼成法が古い時期から見られるのかどう

か。豊前地方の第Ⅳ期では「身の蓋受けがなくなり、蓋の方にこの製作が移っている」と言われているが、この逆転現象とも関連するので、今後十分に検討すべき問題であろう。④ 窯印は灰かぶりや自然釉が最も強い部分を少しずれた位置か、その反対側に見られる。このことがもしも、灰や自然釉により窯印が消えることを避けるためであるとしたら、窯印の性格を知る一つの材料となるかもしれない。

影塚１号墳出土の須恵器は野添六号窯・九号窯出土の須恵器に極めて近い形態である。これは第Ⅲ期Ｂから第Ⅳ期と考えられている。高台の付いた坏は追葬の際のものとの見方もできるが、福岡市上和白の高見３号墳や５号墳でも、原位置を動いた状態で出土したとはいえ、影塚１号と同じような組合せで出土している⑤ので、この時期に蓋受のある坏と高台の付いた坏とが並存してもさほど不自然ではないように思える。　（佐藤伸二）

註　①三島格「熊本県八代郡大野窟古墳」九州考古学19、1963年　福岡。

②「沖ノ島Ⅰ—宗像大社沖津宮祭祀遺跡　昭和44年度調査概報—」宗像大社復興期成会　昭和45年　福岡

③「野添・大浦窯跡群—筑紫郡大野町大字上大利所在古窯跡群の調査」福岡県文化財調査報告書第43集　福岡県教育委員会　1970　福岡。

④小田富士雄「九州の須恵器序説—編年の方法と実例(豊前の場合)—」九州考古学22号　1964年　福岡

⑤「福岡市和白遺跡群発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集　福岡市教育委員会　1971年　福岡。

Ⅴ　影塚周辺の後期古墳

影塚古墳の調査期間中、影塚周辺の古墳の分布調査を行なった。範囲は影塚の東と南側油山から北西にのびる丘陵を中心とした。影塚周辺には、いくつかの古墳の存在が以前から知られており、昭和43年度以降、３ヵ年計画で行なった分布調査の結果、図のNo.３～No.28、No.29～No.44が、それぞれ駄ヶ原古墳群・霧ヶ滝古墳群として、福岡市埋蔵文化財調査報告書・第12集『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表・総集編・1971』に記載されている。それらの古墳と今度の調査とでは、一部重複するものもあるが、一応、実見したものについてはすべて記しておくことにした。

〔立　地〕

油山から北西に向かってのびる丘陵の斜面、または尾根上に分布し、標高45ｍから 140ｍにかけての範囲に含まれる。斜面にあるものは、きわめてゆるやかな斜面にあるもの（No.62～No.86）を除けば、多くは丘陵南側に立地する。

〔グループ〕

単に同一丘陵上に立地するものを同一グループとしてとらえるならば、６グループに分けることが可能である。（破線で囲んだグループ）しかし、このグループの分けかたにつ

いては、まだ少々問題が残る。それは、第6グループ南部の3基の開口方向が、他のそれと違いすべて東を向き、このグループ内でもほかのものと分けることも可能であろうし、第5グループの中にも、ただ1基北々東に開口するものがあるが、これは同一の谷に向いて開口しているという点で、ほかのものと同一のグループに入れた。

〔石室の開口方向〕

大部分のものが、等高線に対して直角をなして谷に向いて開口する。

第6グループは、きわめてゆるやかな斜面にあり、そのために、石室の開口方向は等高線に平行になっているものもあるが、基本的には東・西側の谷に向いている。ほかのグループは、北西にのびる丘陵の南側斜面に立地するため、谷に向いて開口するものは当然のこととして南から西の方向に向く。第5グループのうちの1つは、ほとんど例外として北北東に向くが、同一の谷に開口するものでもあり、距離的なことも考えて、第5グループの範囲に入れた。

次に、これらの古墳群の被葬者について見てみよう。

これらの古墳群は、福岡平野と早良平野を限る油山北麓丘陵上にあって、早良平野一帯を見下すことのできる地を占めることから、早良平野に生活の基盤をおく人々の墓地であろうことを推測しても大過ないのではあるまいか。

さらに、「和名抄」筑前国、早良郡の条には「能解」郷の名が見える。「和名抄」にいう「能解」郷が現在の野芥とほぼ同じ地にあったものとみてよければ、この地域における集落の存在が考えられ、西油山一帯の古墳群は、早良平野東部に農業生活の基盤をもった「能解」郷の人々の墳墓群と考えられないこともない。

この推定には、ここで論じている6つのグループが旧「能解」郷の比定地に近いという点から導かれた推定であるが、郷とその墳墓との関係は、距離のみで論ずることはできない。その理由を簡記すれば、このグループに接続して、至近に大谷古墳群、さらに徳栄寺付近に所在する古墳群などがあり、また早良平野のほぼ中央に位置する小田部（旧田部郷に比定されるか？）などは、野芥のような、地形的に墳墓を至近に造り得ない面も考慮しなければならない。

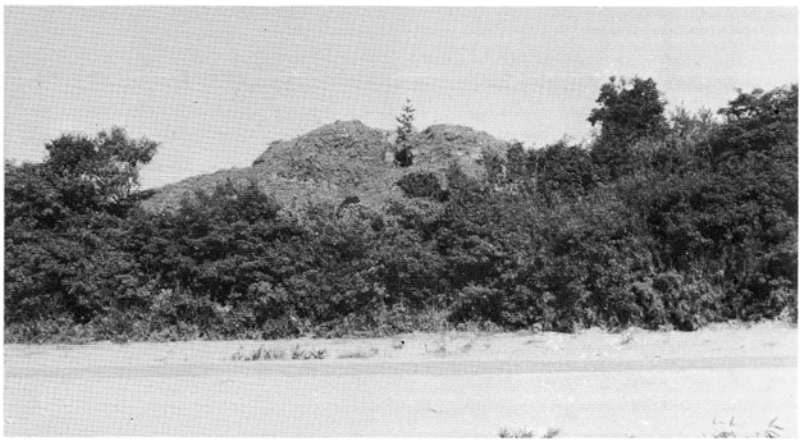
この問題については、さらに詳論の折を得たい。

最後に、第17図の古墳の分布図は、この地域内のすべての古墳を記録したものでないことはいうまでもなく、たとえば、第1～第3グループと第4・第5グループの間の地域には、今度の調査では立ち入っておらず、第4グループと第6グループの間も調べていないのでこの間の古墳の存在については不明である。　（三島格・藤田和裕）

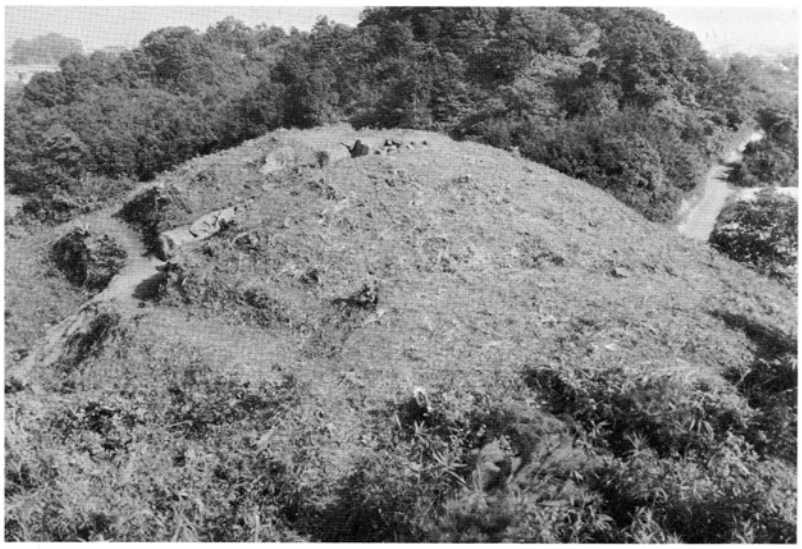
註　①三島格「福岡平野の製鉄遺跡」『和白遺跡群』1971　福岡。

第17図　影塚周辺古墳分布図

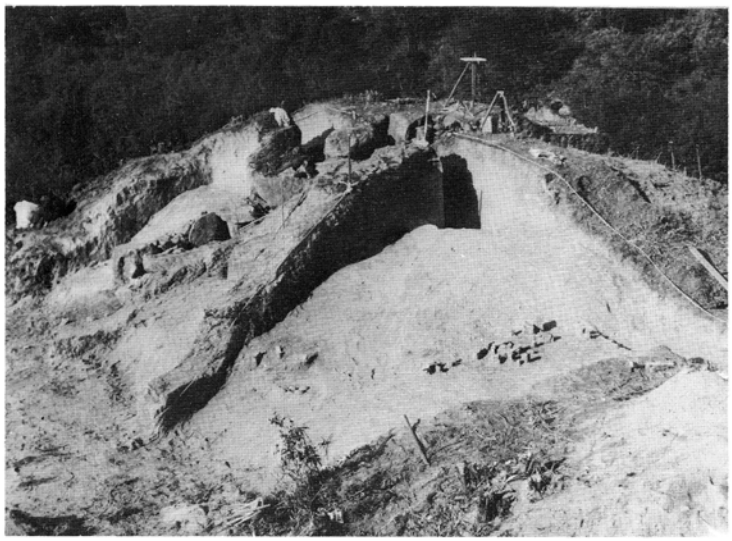
影塚１号墳　遠景　　（北西より）



影塚１号墳　　（西より）



影塚１号墳　発掘前の墳丘　　（南西より）



発掘状況および遺物出土状況

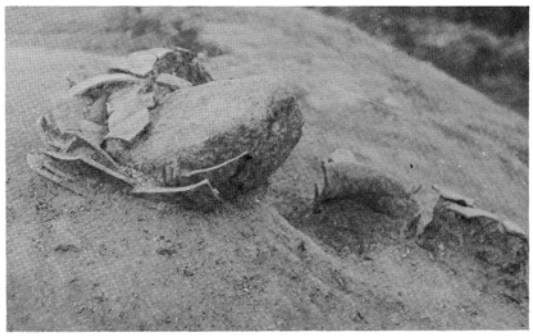
土師器出土状況

須恵(壺)出土状況

発掘前の石室の状態

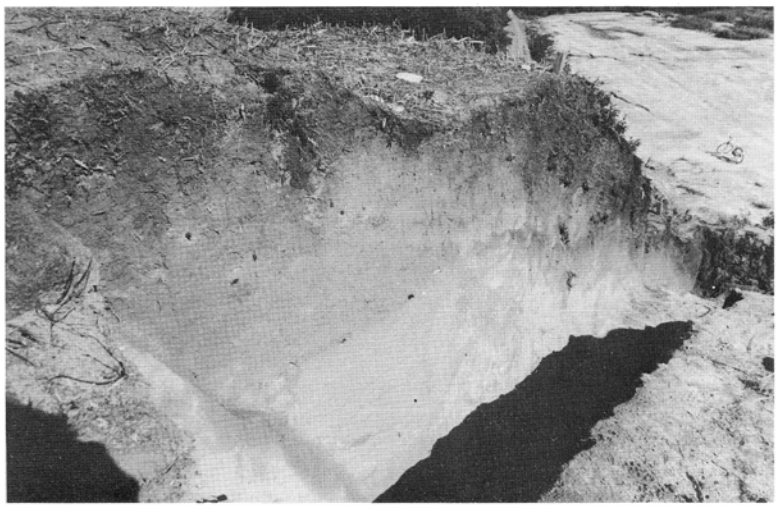
須恵器(甕)出土状況

須恵器(杯)出土状況



石でわられた須恵器(甕)出土状況

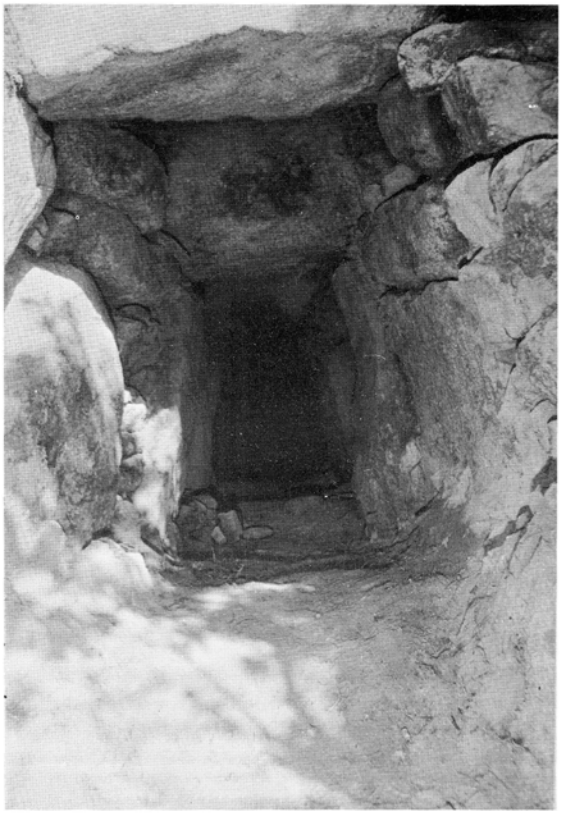
影塚１号墳　発掘前の石室開口状態



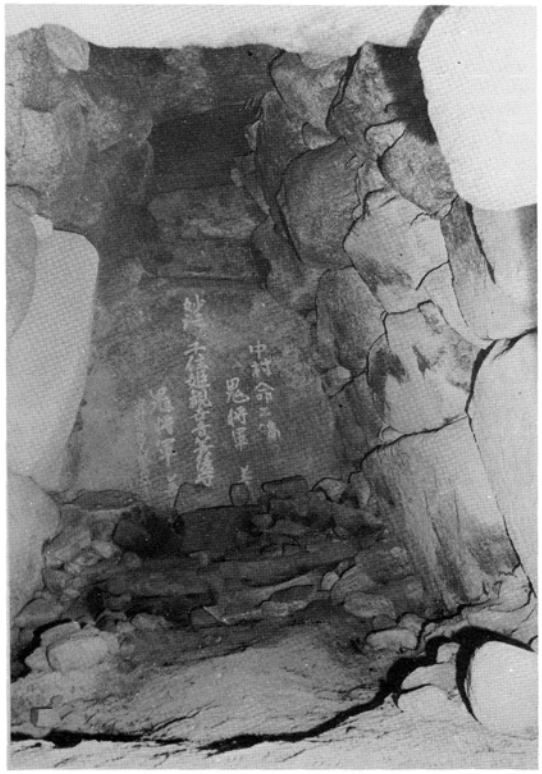
影塚１号墳　土拡堀り込みの状態

影塚１号墳　墳丘内遺物出土状況

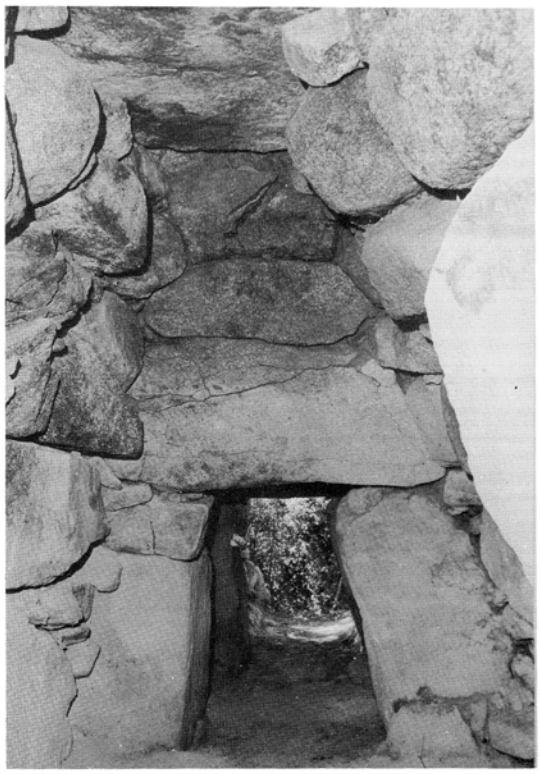
影塚１号墳　奥壁



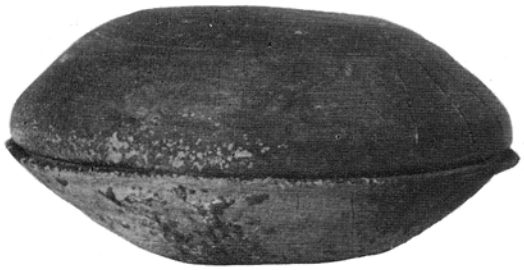
影塚２号墳　（羨道部より奥壁を見る）



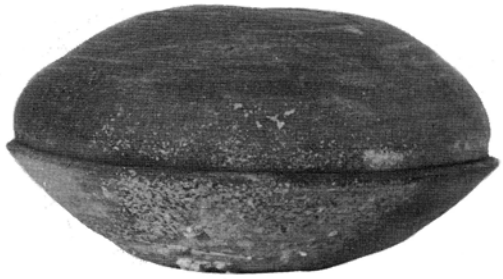
影塚２号墳（前室より奥壁を見る）



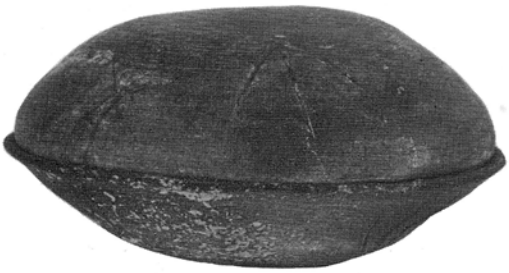
影塚２号墳（後室より羨道部を見る）



（第９図・１）

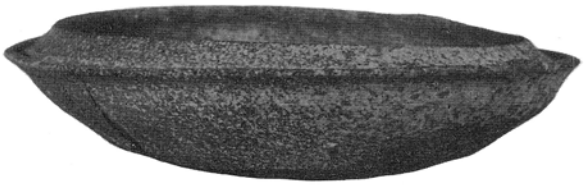


（第９図・２）



（第９図・３）

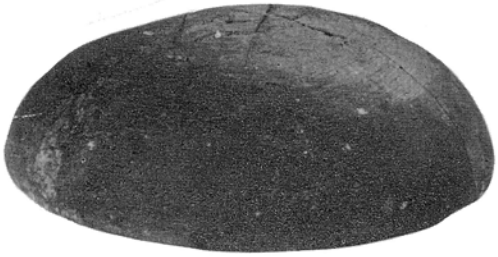
（第９図・７）



（第９図・４）

（第９図・８）

（第９図・５）

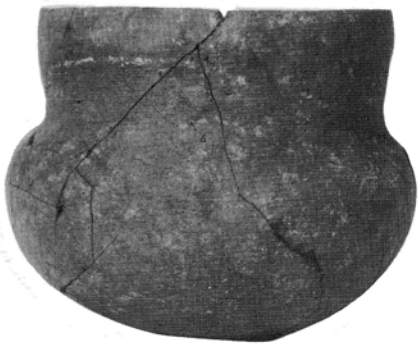


（第９図・６）

（第９図・９）

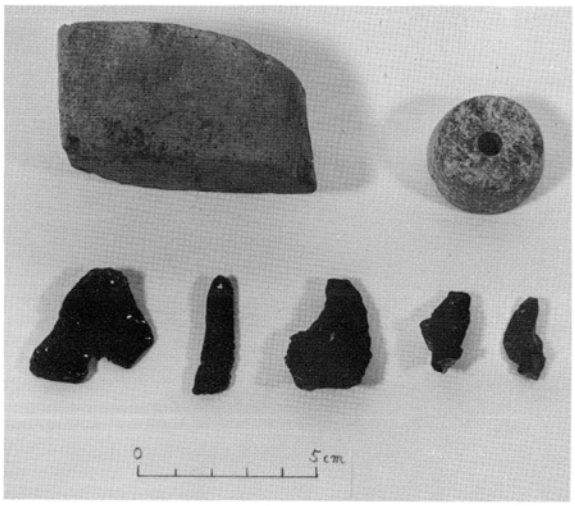
（第14図・1）

（第14図・4）

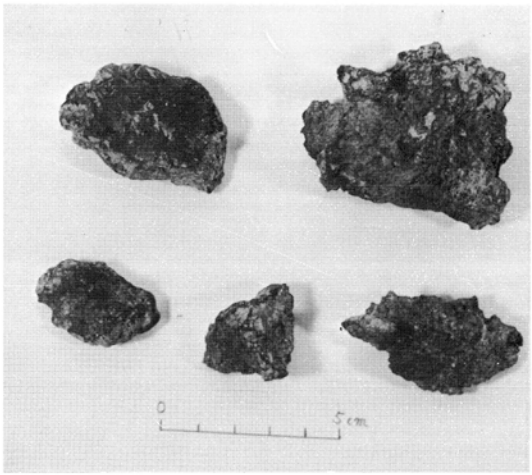


（第14図・3）

（第10図・2）



墳丘内出土石斧・滑石製紡錘車・黒耀石



墳丘内出土　　鉄鏃

影塚第１号墳
福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集

昭和47年３月31日

編集
発行　福岡市教育委員会
印刷　㈱チューエツ福岡工場